

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 30 日現在

機関番号：32402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730518

研究課題名(和文) 集団の成立基盤に関する社会心理学的研究

研究課題名(英文) A social psychological study of basis of group formation.

研究代表者

尾関 美喜(Ozeki, Miki)

東京国際大学・人間社会学部・講師

研究者番号：30574735

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)： 集団アイデンティティは、「自分がある社会集団に所属している」という個人の認知と、その集団成員であることに伴う価値や情緒的意味をさす。この領域において、「集団全体でみた場合の集団アイデンティティ、すなわち集団レベルの集団アイデンティティとは何か」という問いは、20年解決されていない。この課題に対し、本研究は、集団レベルの集団アイデンティティは集団成立の基盤であることを示した。

研究成果の概要(英文)： Group identity is defined as "an individual's self-concept which derives from his or her knowledge of his or her membership within a social group together with the value and emotional significance attached to that membership. Group-level group identity(GGI), which is defined as group identity within a whole group had been an important unsolved issue in area of social identity theory. Current study offered an answer to this issue by showing that GGI was an basis of a group.

研究分野：社会心理学

キーワード：集団 社会的アイデンティティ理論

1. 研究開始当初の背景

集団アイデンティティは、「自分がある社会集団に所属している」という個人の認知と、その集団の成員であることに伴う価値や情緒的意味をさす(Tajfel, 1978)。集団アイデンティティ研究は、社会心理学における主要な研究領域の一つであるとともに、幅広い学問分野に貢献してきた(Postmes & Jetten, 2006)。その知見は、集団間紛争、組織改革(尾関, 2011a)、所属集団への適応(尾関, 2011b)など、現代の社会と人が抱える問題の解決に貢献している。

この領域において、「集団全体でみた場合の集団アイデンティティ、すなわち、集団レベルの集団アイデンティティ(Hogg, 1992; 以下GGI)とは何か」という問いは、大きな未解決課題であり続けてきた(Postmes et al., 2006)。先行研究(Swaab et al., 2008; Jans, et al., 2011)は、個々人の心的過程に焦点を当てたため、この問いに答えられなかった。それに対して、申請者は、GGIが「単なる人の集まり」を「集団らしい集団」とするうえで重要な鍵である可能性を示唆する結果を得た(尾関・吉田, 2012)。申請者は、個人内の心的過程と、集団を単位とする、集団レベルのプロセスモデルを弁別して検討する、マルチレベル・アプローチを用いている(尾関・吉田, 2009; 2012)。この手法を用いると、個々人の集団アイデンティティとGGIを弁別したうえで、それぞれの機能を同時に比較検討できる。

そこで、本研究では、マルチレベル・アプローチによって、GGIが集団成立の基盤であるかを明らかにする。それによって、「集団レベルの集団アイデンティティとは何か」という問いに答えを出す。そして、集団そのものにとっての、集団アイデンティティの機能を明らかにする。

2. 研究の目的

本研究では、集団レベルの集団アイデンティティが集団成立の基盤となっているかを検討する。

そのために、多様な集団を対象として、集団レベルで、集団アイデンティティが集団の条件となる指標を予測しているかを検討する。人々の集まりが集団であるためには、集団規範、成員間の相互作用、成員間の情緒的絆、成員間の相互依存性の4つが必要である(Levin & Moreland, 1994)。これまで、申請者らによって、集団レベルの集団アイデンティティ(=GGI)が、集団規範の形成に寄与することが明らかにされている(尾関他, 2011)。

そこで本研究では多様な集団を対象に、残る3つの条件、すなわち、成員間の相互作用、成員間の情緒的絆、成員間の相互依存性を、集団レベルの集団アイデンティティが予測するかを、マルチレベル・アプローチによ

て検討する。多様な集団で、特に集団全体というマクロなレベルで、集団アイデンティティが成員間の相互作用を促進し、情緒的絆を強化するとともに、相互依存性を高める効果を持つことが示されれば、GGIが集団成立の基盤であるといえよう。

集団研究は、既存の集団を対象とするもの、実験集団を対象とするものに大きく分かれる。本研究では、既存の集団と実験集団を対象に、両タイプの集団において、成員間の相互交流、成員間の情緒的絆、成員間の相互依存性を、集団レベルの集団アイデンティティ(=GGI)が予測するかを検討する。

3. 研究の方法

研究1

2012年に私立大学のゼミ24個に対し、質問紙調査を行った。241名の学生の回答を得、分析に用いた。

【質問紙の構成】

集団アイデンティティ 所属ゼミへの集団アイデンティティを、集団アイデンティティ尺度(尾関・吉田, 2007)を用いた。

成員間の相互作用 成員間の会話時間や携帯メールを通じた相互作用頻度を測定した。

成員間の情緒的絆 高木・戸口(2006)による、「絆」尺度を、一部表現を改めて使用し、他成員との間に心理的な絆をどの程度感じているかを測定した。

□成員間の相互依存性 大学生用ソーシャルサポート尺度(嶋, 1992)を用いた。

研究2

2013年に私立大学の大学生を対象に、集団実験を行った。

学科や学年の異なる学生2~4名で1つの集団を構成し、実験室で討議課題を行った。セッションは前半、後半の2セッションに分け、参加者の顔が映らない角度で実験を録画する。後半セッション終了後に、実験の目的を開示して終了した。

実験には32集団(92名)の大学生が参加した。

【測定する指標】集団アイデンティティ 集団アイデンティティ尺度(尾関・吉田, 2007)に、前半セッション終了後、後半セッションに入る前に回答してもらった。

成員間の相互作用 一連の実験を録画し、後半セッションの発言数を測定した。

成員間の情緒的絆 全セッションの終了後、共に課題に取り組んでいるメンバーに対して心理的なつながりを感じる程度を5件法で尋ねた。

成員間の相互依存性 全セッションの終了後、課題を行う上で、他のメンバーに助けられたと感じる程度を5件法で尋ねた。

研究1、2ともに分析方法は同一の方法を用いた。

マルチレベル構造方程式モデリングを用いて、集団アイデンティティを独立変数、成員間の相互作用、成員間の情緒的絆、成員間の相互依存性を従属変数とし、集団レベルのモデルにおいて、集団アイデンティティが3つの従属変数を予測するかを検討した。

4. 研究成果

研究1、研究2でも予測は支持され、集団レベルの集団アイデンティティが、人の集まりが集団であるための基準となる指標の全てを予測していた(Figure 1, 2)。

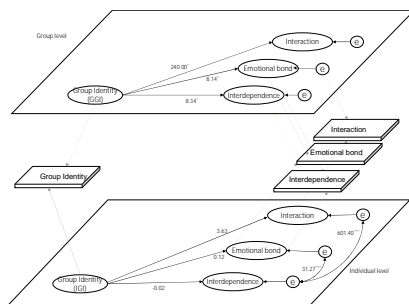


Figure 1 集団レベルの集団アイデンティティが成員間の相互作用、成員間の情緒的絆、成員間の相互依存性に及ぼす影響(ゼミ)

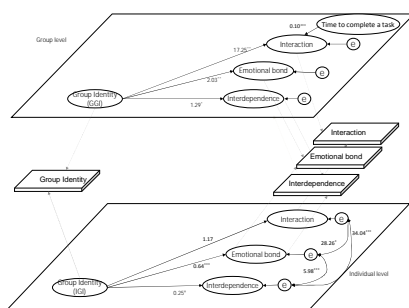


Figure 2 集団レベルの集団アイデンティティが成員間の相互作用、成員間の情緒的絆、成員間の相互依存性に及ぼす影響(実験集団)

つまり、集団レベルの集団アイデンティティが成員間の相互作用を促進し、情緒的絆を強化するとともに、相互依存性を高める効果を有していた。

この結果から、集団レベルの集団アイデンティティが「単なる人の集まり」を「集団らしい集団」とするための基盤であることが示された。

集団レベルの集団アイデンティティは、集団全体として、個々人の集団アイデンティティが一定水準以上高くなければ高まらない。このことから、個々の集団成員の持つ集団アイデンティティが高まってはじめて、

人の集まりは集団として機能するといえよう。

本研究は、社会的アイデンティティ理論分野の研究において20年来の未解決課題であった、「集団レベルの集団アイデンティティとは何か」という問いに答えを出すことができた。同時に、マルチレベル構造方程式モデリングを用いて、個々人の回答から集団の様相を描き出す、マルチレベル・アプローチが集団研究において有効であることを示唆することができた。この手法の特徴は、個人の認知過程と集団レベルで生起している現象を弁別することができることから、個人の認識している集団の姿と、集団の実態を分けてモデル化することが可能である。こうした手法は、今後の集団研究の発展に貢献するものであり、その有効性を示すことができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Ozeki, M. (2015). Group-level group identity as a basis of a group. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, 19, 166-180.

〔学会発表〕(計 7 件)

1. 尾関美喜 (2012). 集団の成立基盤としての集団アイデンティティ(1)

マルチレベルの視点から 日本グループ・ダイナミクス学会第60回大会(発表論文集, 34-35.)

2. 日置孝一・縄田健悟・尾関美喜・三船恒裕・浦光博 (2013). 「主体としての集団」研究を考える 若手集団研究者の挑戦(話題提供者「マルチレベルモデルはどこまで有効か?」) 日本社会心理学会第54回大会

3. 尾関美喜 (2014). 集団の成立基盤としての集団アイデンティティ(2)

実験集団を対象としたマルチレベルモデルによる検討 日本社会心理学会第55回大会

4. Ozeki, M., Mifune, N., & Nakashima, K. (2013). Group-level group identity as a basis for group norm. 13th European Congress of Psychology, Stockholm, Sweden.

5. Ozeki, M. (2014). Can group-level group identity be a basis for a group? 17th European Association of Social Psychology General Meeting, Amsterdam, Netherland. (発表論文集, p.182)

6. Ozeki, M. (2014). Can group-level group identity be a basis for a group? An experimental study. 28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France.

7. 尾関美喜 (2014). 集団アイデンティティは集団成立の基盤か？マルチレベルモデルによる検討 S 研

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

東京国際大学・人間社会学部・専任講師

尾関美喜(Miki OZEKI)

30574735